

# 堀文学に描かれた「軽井沢」の表象とその変遷

吉良佳恵

キーワード：堀辰雄、軽井沢、風土観、西欧的感覚、生と死

## 1. 研究の背景と目的

昭和期に活躍した作家堀辰雄は、大正十二年十九歳の時に初めて軽井沢を訪れて以来、その地に親しみ、軽井沢を舞台とした数多くの作品を残している。宣教師の発見により避暑地として発展していた軽井沢は、当時、日本にあって日本ではない異国情緒が感じられる世界であり、フランス象徴派に学び、結核療養をしながら文筆活動を行う堀にとっては最適な場所であった。

本論文では、堀の作品のうち、特に軽井沢を舞台とした三作品、『ルウベンスの偽画』（1930）、『美しい村』（1933）、『風立ちぬ』（1937）を取り上げ、各作品に描かれた「軽井沢」がどのような特徴を持ち、また作品ごとにその世界をどのように変えていったのかを探ることを目的とする。

## 2. 方法

堀辰雄『ルウベンスの偽画』、『美しい村』、『風立ちぬ』の三作品において、その自然描写、登場人物、世界観などの要素から、各作品における「軽井沢」の表象を探り、その類似点、相違点を比較する。

## 3. 結論

堀辰雄にとっての軽井沢は、当初、生まれ育った東京小梅の下町から逃れた先の憧憬の世界であった。そうした軽井沢に対する新鮮な感動を反映させたのが、『ルウベンスの偽画』の「軽井沢」である。登場人物は特権階級の人間であり、ここでは日本離れした西洋文化の影響が強く見受けられる。また、ほかの村人や村の姿はあらかじめ排除されている。

『美しい村』では、避暑地としての高原を肯定する一方、別荘で過ごす人々と関わりなく自分たちの生活をもつ村人、別荘の裏側を通る塵芥車の様子など、『ルウベンスの偽画』には見られなかった生活や労働といった現実社会が描かれている。

また、『風立ちぬ』においては、死によって閉ざされた世界で生の幸福を愉しむという主題の影響から非常に内省的であり、ここでは精神的な価値に重きが置かれている。もはや、外国人やハイカラな西洋文化に憧れる様子は見られない。

以上のように、堀文学に描かれる「軽井沢」は、彼が下町から出発した若い時代に、憧憬と挑戦の精神から生まれ、その後、婚約者の死や堀自身の病など、過酷とも言える人生経験からもたらされた精神的成熟によって、その価値を表面的・物質的なものから精神的なものへと変えていった。堀にとっての「軽井沢」は、自己の内的世界の投影と言えるだろう。